

岡本太郎生誕100年を記念する事業のひとつとして、株式会社高島屋(以下、高島屋)が主催するプロジェクト、“蘇れ! 岡本太郎の『ダンス』”が完成し、2011年3月1日に高島屋大阪店7階のレストランフロアのエンタランスホールで披露されました。岡本太郎が1952年に愛知県常滑市の伊奈製陶(後のINAX、現LIXIL)で制作したタイル画の『ダンス』は、およそ、2.4×3.5mの大きさに、38を超える色数の1cm角のタイルピース約57,000枚が用いられた大作です。同年、開催された高島屋大阪店の渡欧記念展で展示された後、大食堂に飾られ、1969年頃の改装により取り外されて史料館に保存されていたそうです。40年ぶりに、この『ダンス』の汚れやホコリを洗浄し、劣化した下地を補強した上で一般公開するというプロジェクトは、岡本太郎が1ヵ月泊まり込みでモザイクタイル画制作をした常滑のINAXで行われました。

1. プロジェクトの始まり

2010年10月、INAXライブミュージアムものづくり工房に、『ダンス』は慎重に運び込まれました。接着剤の劣化が進んで運搬中にタイルが1枚でも剥がれた場合、全面のタイルを剥がして修復する覚悟でしたが、幸い運搬中のタイル剥離はなく安心しました。しかしながら、調査を進めていくと下地板自体には補強が必要であることが分かり、展示場所への運搬も合わせて考慮しながら、3分割して補強することにしました。分割に必要な最小限のタイルを剥がしながらタイル表面を洗浄し、展示場所に運搬、組み合わせた後、接合部分のタイルを再度張り付けていくという作業工程です。

2. 岡本太郎と職人たちの手跡を追って

タイルの一部を剥がして、元の場所に再度張り

付ける修復作業は、岡本太郎と当時の職人たちの手跡を追うことであり、岡本が何を考え、何を思いながら制作したかを推測しながら作業を進めました。作業中、見えてきた岡本のこだわりを幾つか紹介します。

目地へのこだわり

セメントで出来たタイルの目地は灰色であるのが一般的ですが、『ダンス』ではタイルの色に合わせて色がつけられていました。絵画としての作品にこだわる岡本は、目地により、色が分断されることが耐えられなかったのかもしれませんが、時間がたち、目地表面の色はくすんでいましたが、タイルと一緒に剥ぎ取られた目地内部の色は鮮やかで、分析の結果、油絵の具に用いられる顔料と同じ成分が着色剤として用いられていることが分かりました。取り除いた目地材は拾い集めた上で、再生する目地材に混入させて再利用しました。

タイルの色へのこだわり

綿棒を使い一枚一枚丁寧に洗浄していると、岡本太郎がタイルの色の微妙な違いを意識して使い分けていたことが分かりました。タイルは焼きものであり、同じ原料を同じ調合で用いても、焼きの温度でその色は微妙に異なってしまいます。工業製品としてタイルを用いる場合は、この微妙な色の違いは色幅と呼ばれ、自然な風合いを醸し出す要素とされています。しかしながら、芸術家にとってはこの微妙な色の違いは意識して使い分けをする必要があったのだと思います。何度も微妙な色合いのタイルの位置を修正して用いていた様子が確認できました。

赤色へのこだわり

岡本太郎は著書の中で語っているように、幼い頃から“赤”が好きで、とりわけ血を連想させる激しい赤に惹かれていたそうです。『ダンス』に使われた赤色の部分に使用されたタイルからも、そのこだわりを感じることができました。赤色部分のタ

イル表面には赤の塗料が塗られ、その一部は剥がれかけており、下から黄色いタイルが見え隠れしていました。岡本の求めた“赤”は焼きものでの再現が最も難しく、当時の伊奈製陶のモザイクタイルの見本色には存在しない色でした。しかし、あくまでも理想の“赤”を追究した岡本は、黄色いタイルの上から赤い塗料で色をつけたのだと思います。この“赤”をどのように保存し、蘇生させるかについて、高島屋との度重なる協議を繰り返しました。結論は、塗料が剥げたタイルについては、岡本の痕跡を残しながら、そのまま透明なコーティング材を塗って保存し、剥がれた部分には再度赤い塗料を塗ることで、岡本の赤を使いたいという意志を受け継いで表現することでした。

3. 岡本太郎の思いを知り、思いを伝えるために

岡本太郎の手跡を辿りながらの修復は、岡本と対話している気分でした。おそらく、当時、岡本の指示に従いモザイクタイルを敷き並べた伊奈製陶の職人たちも“岡本太郎になったつもり”で作業するために、多くの会話をしたと思うのです。当時の職人と岡本との強烈なやり取りが目に見えられます。対話する相手が元気だと自分も元気になれることは、昔も今も変わらないと思います。当時の職人たちが、岡本太郎からどれほど元気をもらい、楽しく、そして熱く仕事をしたのか、容易に想像できます。“もの”が語るとはよく言いますが、まさに『ダンス』が我々に、当時のものづくりの楽しさ、こだわりを語りかけてくれ、同時に元気をもらうこともできました。これからは、高島屋を訪れる人びとが、この『ダンス』から元気を感じていただければ、修復に携わったものとしてこんなにうれしいことはありません。

ごとう やすお——INAXミュージアム推進グループGL



1——修復完成した『ダンス』(高島屋大阪店7階) | 2——岡本太郎の“赤”を出すために、黄色いタイルの上に赤い塗料を塗布している様子 | 3——鮮やかに着色されていた目地